

大塚金之助（1892-1977）

- その人生と日本-東ドイツ間交流で果たした役割

教育

マルクス主義経済学者・大塚金之助は、1892 年、東京都神田の労働者階級の家庭に生まれた。自身で記した経歴書によれば、彼の両親は学校に通ったことがなかったという。

大塚は 1910 年から 1914 年の間、学費免除の特待生として神戸高等商業学校（現神戸大学）に学んだ。しかし、無政府主義者エマ・ゴールドマンとその主張に好意的な文章を発表したため（「主義者『ゴールドマン』」、『神戸高等商業学校学友会報』58 号、1912 年 5 月、p.331-336）、文部省は同学校長と図書館長を譴責、掲載誌は回収された。この事件をきっかけに、大塚は特待生待遇を失うこととなった。

だが東京高等商業学校（現一橋大学）に進学、1916 年に卒業した大塚は、卒業直後から同校の教壇に立ち始める。

文部省の奨学金を得た大塚は 1919 年から 1923 年にかけて、ニューヨークのコロンビア大学、ロンドン大学およびベルリン大学（現フンボルト大学）に留学した。彼が留学した頃、欧米はちょうど大変動の時代を迎えていた。大塚はアメリカでストライキや黒人に対する差別的な扱いを目の当たりにしたが、その頃ドイツではインフレによってストライキが頻発し社会不安が高まっていた。大塚はロンドンで社会主義者で改革論者だったシドニー・ウェブの講座を受講した。ベルリンではとうとうマルクス主義と出会い、急激にのめりこんでいく。この時期、彼は社会主義文献の収集に着手している。

大学教官時代

大塚は 1924 年に東京商科大学（現一橋大学）でまず助教授、1927 年には教授となった。1926 年にはアルフレッド・マーシャル『経済学原理』の初の日本語完訳版を脱稿し、4 巻組みで出版した。彼はドイツ語が出来たため、カール・マルクスの『資本論』や『剰余価値学説史』も原語で読んだ。その後数年のうちに、彼は多くの著作を通じてマルクス主義経済学者としての地位を確立した。1927 年には東京社会科学研究所の設立に積極的に携わり、1930 年まで所長を務めた。大塚は消費組合運動の支援などを通じて、日本のプロレタリア運動にさまざまな形で貢献した。彼は日本共産党の正式なメンバーではなかったが、経歴書に地下活動を行う秘密組織の一員だったと記している。1931 年、大塚は音楽教師だった石川秀子と結婚した。

日本資本主義論争

時が経つにつれ、反体制派の置かれた状況は厳しさを増した。1925 年に制定された治安維持法の目的は反体制的な意見を統制することにあった。これはとりわけ無政府主義者、社会主義者および共産主義者の活動抑圧を標榜したものであった。天皇を国の中心に据える日本特有の「国体」思想への批判はなんでもあれ厳しく処罰された。

それにもかかわらずマルクス主義研究者のグループは、有力な同主義理論家だった野呂栄太郎の指揮の下、明治維新以降の日本資本主義に関する包括的な分析を世に送り出した。この 7 巻から成る『日本資本主義発達史講座』の共同編集には野呂、大塚を含む 4 人が参加した。彼らの大事業が実行に移されたのは、日本の帝国主義と軍国主義が急速に拡大していく最中のことだった。日本の満州侵攻はすでに進行中で、第 1 巻が出版された 1932 年 5 月には、一連のクーデター計画の流れの中で、犬養毅首相が海軍青年将校らによって射殺された五・一五事件 が起こった。

『日本資本主義発達史講座』の出版計画は、執筆者の逮捕や非合法活動への連座、あるいは病気により、幾度も変更を余儀なくされた。野呂栄太郎はテーマごとに概論を書こうとしていたが、これはけっきょく実現しなかった。容赦ない検閲により、同『講座』は極度に改訂された形でしか出版がかなわなかった。第 4 回配本は完全発禁処分となり、第 5 回以降は当局の手によって多数の削除や改訂が行われた。原著は 1933 年 8 月に完成したが、検閲された部分も含む完全復刻版の刊行は 1982 年の岩波書店版まで待たねばならなかった。数々の障害に関わらず、『日本資本主義発達史講座』は当時の知識人や学生に大きな影響を及ぼし、マルクス主義理論家たちを大きく二分した日本資本主義論争において重要な役割を果たした。

『日本資本主義発達史講座』の編集者は、いわゆるコミンテルンの 32 年テーゼを基本的に支持していた。32 年テーゼは日本の帝国主義、そしてプロレタリア革命をもたらす 2 段階革命の大きな障壁となる、後進的かつ封建的な天皇制の残る日本の現状を激しく糾弾していた。32 年テーゼの日本語訳が党機関紙『しんぶん赤旗』で公開された 1932 年 7 月には、既に『日本資本主義発達史講座』の第 2 巻が刊行されていた。『講座』の主要な部分は 32 年テーゼの理論的な裏づけとなり、日本における二段階革命の必要性を広く世に知らしめた（まず天皇制の崩壊を含むブルジョア革命、後にプロレタリア革命）。その結果、マルクス主義者たちの活動において『日本資本主義発達史講座』（講座）の唱える思想を支持した人々は「講座派」と呼ばれた。

彼らは、雑誌『労農』と密接な関わりを持つマルクス主義経済学者の一派「労農派」と対立していた。労農派は、明治維新こそがブルジョワ革命であり封建主義は既に終焉を迎えたという観点から、一段階の革命を主張していた。彼らが主張する次のステップとは、大衆の教育を以ってプロレタリア革命を遂行することであった。

逮捕

論争が続く最中の 1933 年 1 月、伊豆湯ヶ島の温泉宿で『講座』原稿を執筆していた大塚とその妻が逮捕された。大塚は、日本共産党に経済的支援を行った事で治安維持法違反に問われ、起訴された。結核に罹っていた野呂栄太郎も 1933 年 11 月に逮捕された。拷問は野呂の病状を悪化させ、彼は 1934 年 2 月に獄死した。

1933 年 7 月に大塚の第 1 回公判が行われ、懲役 2 年執行猶予 3 年の判決が下された。しかし検察は、大塚が共産主義思想を本気で捨てたとは信じていなかった。第 2 回公判では、当時投獄されていた幾多の共産主義者と同じように、大塚も転向を認める正式な上申書を提出したが、1933 年 11 月に下された判決は懲役 2 年執行猶予 3 年のままであった。大塚は再び自由の身となったものの、当局の厳しい監視下に置かれた。

1933 年から 1945 年は苦難の時代だった。大塚は大学での地位を失っただけでなく、一切の公職につくことを禁じられた。妻の個人教授や大塚が翻訳で得た報酬と、友人の援助によって彼らは生計を立てた。大塚は状況が許す範囲で研究を続けたが、当面の間は人文学や世界史のより中立的なテーマへ目を向けることにした。彼はトマス・モア、アルベルト・アインシュタイン、アダム・スミス、リヒャルト・ワーグナー等についての文章を発表し、戦後これらの文章を編集したものが『解放思想史の人々』のタイトルで、岩波新書青版第 1 号として出版された。

大塚は当時の思想警察である特別高等警察に見つかることを恐れ、1940 年から 1941 年にかけて自らの蔵書のうち邦書 1,000 冊、洋書 500 冊をひそかに焼き捨てた。1959 年になってようやく、大塚は焼却した蔵書の目録を作成し、私家版の形で 50 部出版した(『Index Librorum Prohibitorum in the Pre-War Japan』)。

戦後

戦争終結後の 1945 年、大塚は大学に教授として復職を果たした。彼は教育者・研究者として再び仕事に取り組み、社会主義、経済学、その他様々なテーマについて多岐にわたる著作を出版した。1950 年には日本学士院会員に選出された。さらに大塚は、わけでも東ドイツ(GDR)との文化交流推進を主眼とする日独文化の会(1954 年創立)の活動を支援した。ここでひとつ心に留めておく必要があるのは、日本が西ドイツとの間に正式な外交関係を樹立したのが 1955 年だったのに対し、東ドイツとの正式な国交樹立は 1973 年まで待たねばならなかったことである。とはいえ同協会はこうした限定的な活動にほとんどタッチせず、両国の交流は主にメンバーの個人的なレベルにとどまるものだった。

大塚は 1956 年に一橋大学を退官した後も、1973 年まで慶應義塾大学で教鞭をとり続けた。また彼はこれと同時に明治学院大学の教授ポストを得た。明治学院大学の大塚ゼミは、ベルリンの有名な大通りにちなんだ『Unter den Linden--リンデンの木かげ--』（ウンター・デン・リンデン）というゼミナール誌を作成し、1959 年から 1965 年にかけて 7 号を発行した。

1962 年、大塚は東ベルリンのドイツ民主主義共和国国立図書館に対して最初の蔵書寄贈を行い、その後さらに 5 回にわたって蔵書を贈った。1960 年代に入ると、日本と東ドイツの友好協会(日本 DDR 友好協会または日独友好協会)が大阪、神戸、高知、福岡、東京など日本各地に設立された。大塚は 1973 年、顧問を務めていた日本 DDR 友好協会の会長に就任した。

1956 年の退官後、大塚は会議出席やゆしみのため、あるいは海外研究機関のゲストとして、ヨーロッパやアジアを飛び回り始めた。大塚は基本的に妻を旅行に同伴した。1956 年にはローマとケルンを訪問し、その後ヨーロッパ各地を歴訪した。1959 年には中国科学院から 1 ヶ月の滞在に招かれ、その翌年にはベルリンのフンボルト大学創立 150 周年記念祝典への出席を招待されている。1964 年には朝鮮民主主義人民共和国に次いで北京を訪問しただけでなく、1964 年 11 月から 1965 年 2 月にかけてオックスフォード大学に滞在した。帰国の前には東ドイツに寄り長期滞在している。

その後も、大塚をはじめとする日独友好協会の代表者たちが、1966 年 9 月 12 日から 15 日にかけてワイマルおよび東ベルリンで開催された日本画の展覧会やシンポジウム等のイベントを含む宣伝キャンペーン「日本友好祭」(Tage der Freundschaft mit dem japanischen Volk)に招待され、同地に滞在した。同催しのひとつの目玉は、大塚へのフンボルト大学名誉博士号授与式だった。彼は 1969 年にもベルリンを訪れ、国立図書館アジア・アフリカ部の創立 50 周年記念式典に参列している。

大塚が最後の海外旅行の目的地に選んだのも東ドイツだった。滞在期間中に、東ドイツの全ての国際友好協会を傘下に収める「諸国民友好同盟」(Liga für Völkerfreundschaft)が、大塚に「諸国民友好の星(金章)」(Stern der Völkerfreundschaft in Gold)を授与したところ、大塚は喜んでこれを拝受した。だが1966年、日本政府が大塚に授与しようとした勲二等瑞宝章は受勲を拒否している。

大塚の著作には多くの海外旅行に関する文章が収められている。彼の東ドイツでの体験は、『ある社会科学者の遍歴——民主ドイツの旅』にまとめられているが、これは1969年に日本語で出版された東ドイツに関する詳細な初期の書物のひとつである。

研究者としての業績とは別に、大塚は歌人としてもその名を知られていた。1921年には新聞の短歌投稿欄に、ペンネームを用いた大塚の短歌が初めて掲載された。その一年後には、短歌界を牽引する短歌誌『アララギ』の会員となる。大塚は1927年まで『アララギ』に継続的に短歌を投稿していた。しかし海外留学を終えた大塚のものの見方は、短歌からより政治的な立場にシフトしていた。彼はまた『香圓』(マルメラ)という文学誌に『無産者短歌』というタイトルの記事を発表している。幾度かの中断があったものの、大塚は第二次世界大戦が終わるまで短歌を書き続けた。1933年の逮捕収監時さえ、大塚は書いた短歌をひそかに外部へ持ち出し、1年後に同僚の名を借りたペンネームで発表している。大塚の短歌集『朝あけ』と『人民』はそれぞれ1947年と1979年に出版された。

大塚金之助は1977年にその生涯を閉じた。東ベルリン国立図書館への最後の蔵書寄贈は、1986年に未亡人の手で実現した。大塚の死からわずか3年後には、10巻からなる『大塚金之助著作集』が出版された。また大塚のかつての生徒有志が集まり大塚会を立ち上げた。同会は、『大塚会会報』(請求番号Zsn 131470)を発行し、大塚金之助教授をの思い出を今日まで伝えている。